

[009]ポリモルフィア表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7348008>

出版情報：ポリモルフィア. 9, 2024-03-21. Office for the Promotion of Gender Equality, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



九大フラッシュ

Polymer
Olivin

Polymor

fía
morfía
norfía

QURIES プログラム令和 5 年度実施報告

—台風接近で対面に加え、オンラインも併用—

加藤悠紀

九州大学男女共同参画推進室 テクニカルスタッフ

プログラムの目的

令和5年8月に、今回で3回目となる女子高校生の理系インターンシップQURIESプログラムを伊都キャンパス、および筑紫キャンパスにて対面で実施しました。「QURIESプログラム（以下、本プログラム）」の名称は、Kyushu (Q) University Research Internship in Engineering and Science と、女性科学者のパイオニア、マリ・キュリー (Curie) 博士の名前とを合わせて名づけられています。

九州大学（以下、本学と表記）は本プログラムを通じ、広く女子高校生の理系分野への興味・関心を喚起するための支援を行います。それにより理系分野の研究者を目指す女子学生の裾野を拡大し、学術研究の将来を担う優秀な若手理系女性研

究者・技術者を育成することで、九州から世界へ羽ばたく女性を一人でも多く輩出する事を目指しています。対象は、大学進学前の意欲あふれる女子高校生です。本学の先端的な研究環境の一端に触れる機会を提供するとともに、本学教員をメンターとし、座学では分からない研究活動の体験の場を提供します。

本プログラムは本学名誉教授で世界的に著名な科学者であった故伊藤早苗先生のご遺族からの寄付金により運営しています。学生や若手研究者の育成に尽力された教育者でもあった伊藤先生のご遺族から、「若い人たちが大学進学前に理系分野の研究の面白さ、楽しさを体験する場を創るサポートをしたい」とお申し出があった事をきっかけに企画されたものです。

令和5年度 九州大学 QURIESプログラム オリエンテーション

日 時：令和5年8月8日（火） 10:00～11:30

場 所：九州大学伊都キャンパス稲盛財団記念館 稲盛ホール

次 第：司会進行 萩島 理 副理事（ダイバーシティ担当）

10:00～10:10 1. 挨拶 玉田 薫 副学長（ダイバーシティ担当）、
男女共同参画推進室副室長

※代読 萩島 理 副理事

10:10～10:30 2. プログラム説明 萩島 理 副理事

10:30～11:30 3. 女性研究者の研究活動紹介、質疑応答（2名）

工学府・博士後期課程2年 安部 彩乃

「博士課程に進むまで」

理学府・博士後期課程3年 宮崎 栞

「希土類を光らせる！一兆分の一秒の発光メカニズムの解体新書」

終了後、

11:30～ 受入研究室へ移動



若手女性研究者の講演 1



若手女性研究者の講演 2

今年度の実施状況

今年度は本学への通学が可能な県内の12校から24名の女子高校生が参加し、8月8日に伊都キャンパス稲盛財団記念館稲盛ホールで行われたオリエンテーションにて一堂に会しました。その後、受講生自身が選択したテーマによって配属された19の研究室（工学部、理学部、農学部、に加え、実験研究を行う文学部や他キャンパスの大学院総合理工学府）で、先生方や大学院生の指導のもと研修を行い、最終日18日の午後から受講生による研究活動報告会を開催しました。

オリエンテーションでは、まず、萩島理副理事（ダイバーシティ担当）から挨拶と本プログラムの説明が行われました。続いて、若手理系女性研究者2名による講演を聴講。その後、担当教員や大学院生の引率により各研究室へ移動して、研究活動を開始しました。

当初は8月8日～10日、17日～18日の5日間、配属された研究室で実験や分析などの研究を実際に体験する予定でしたが、台風6号接近の影響を受け、プログラム2日目と3日目の対面実施は急遽中止となりました。対面での研修実施が中止となった期間、受入研究室では、対面で行う実験のための下準備や、オンラインで実験

の事前レクチャーを行うなど様々な対応をしていただきました。それにより、限られた期間にも関わらず、受講生は充実した研究活動を行う事ができました。

最終日の研究活動報告会も当初は対面で行う予定でしたが、各研究室での研究活動期間を少しでも多く確保するため、当初予定より規模を縮小し、オンライン開催としました。2グループに分かれて、各研究室からのオンラインでの発表とはなりましたが、ご指導いただいた先生方や大学院生等も参加くださり、研究活動中の受講生の様子、研究内容へのコメントや受講生への期待の言葉などが多く寄せられました。台風接近という不測の事態により、各研究室における研究活動の期間が短縮されましたが、受け入れ研究室での臨機応変で柔軟な対応により、充実した研究活動が行われた事が受講生の発表から分かりました。研究活動報告会の最後には神崎智子理事（ダイバーシティ担



受入研究室での研究活動の様子

令和5年度 九州大学 QURIESプログラム研究活動報告会

日 時：令和5年8月18日（金） 15:30～16:45

場 所：各研究室からオンライン参加

次 第：15:30～15:35 1. 研究活動報告会の説明 萩島 理 副理事（ダイバーシティ担当）
15:35～16:25 2. 発表 グループ1：進行 萩島 理 副理事
（2グループに分かれて実施） グループ2：進行 浜本 貴一 教授

16:25～16:40 3. 閉会
挨拶 神崎 智子 理事（ダイバーシティ担当）、
男女共同参画推進室長

諸連絡 萩島 理 副理事
16:40～16:45 4. 写真撮影

当）から受講生へのメッセージが贈られ、プログラムの全日程を終えました。

今年度も受講生の報告をまとめる形での実施報告書を作成しています。修了後に実施した参加者アンケートからは、「今まで触れたことも見たこともない機器に触れることができた」「学校では学べないことを実際に体験できた」と、研修を通じて今までにない経験ができた事が分かります。



神崎理事の挨拶



報告する受講生

また、「普段勉強していることが研究に結び付いたことが面白かった」「高校で習っていたことの原理や詳しい内容が学べた」など、研究が身近な物事と繋がっていると感じる機会になった事がうかがえました。大学院生から指導を受け、実験機器に触れるなど、研究室の雰囲気を実際に味わったことで「大学生活が楽しそうだった」「研究室の雰囲気がよかった」と、大学や研究室をより身近に感じるきっかけにもなったようでした。また、多忙な時期に受け入れていただいた研究室側からも「高校生のサポートをしたTAの勉強になった」「学生の教育に好影響だった」と好意的な感想が寄せられ、「より多くの女性科学者を輩出できるようになることを期待しています」との声もありました。

これらの結果を踏まえ、次年度以降もさらに本プログラムを発展させていく予定です。

QURIESプログラムに関する詳細は男女共同参画推進室のホームページからご覧いただけます。
<https://danjyo.kyushu-u.ac.jp/upbringing/qries.php>



全体集合写真

令和5年度九州大学 QURIES プログラム 受講生一覧

研究室 No.	受入研究室 代表者氏名 (職名)	所属 (学部担当)	受講生所属校	学年	受入 人数	演習 場所
1	藤ヶ谷剛彦 (教授)	工学研究院応用化学部門 (工学部応用化学科)	福岡県立宗像高等学校	3年	1名	伊都 キャンパス
2	大野光一郎 (教授)	工学研究院材料工学部門 (工学部材料工学科)	福岡県立筑紫丘高等学校	1年	1名	伊都 キャンパス
3	宗藤 伸治 (教授)	工学研究院材料工学部門 (工学部材料工学科)	福岡県立城南高等学校	2年	1名	伊都 キャンパス
4	森下 浩平 (准教授)	工学研究院材料工学部門 (工学部材料工学科)	福岡県立修猷館高等学校	2年	1名	伊都 キャンパス
5	馬奈木俊介 (教授)	工学研究院環境社会部門 (工学部土木工学科)	福岡県立福岡高等学校	1年	1名	伊都 キャンパス
6	菅井 裕一 (教授)	工学研究院地球資源システム工学部門 (工学部地球資源システム工学科)	筑紫女学園高等学校 福岡県立福岡高等学校	1年 1年	2名	伊都 キャンパス
7	笹岡 孝司 (准教授)	工学研究院地球資源システム工学部門 (工学部地球資源システム工学科)	福岡県立春日高等学校	2年	1名	伊都 キャンパス
8	山西 陽子 (教授)	工学研究院機械工学部門 (工学部機械工学科)	福岡県立春日高等学校 福岡県立香住丘高等学校	3年 2年	2名	伊都 キャンパス
9	櫻井 幸一 (教授) 顧 玉杰 (助教)	システム情報科学研究院 (工学部電気情報工学科電気情報工学・理学部 物理学情報理学科コース)	福岡県立筑前高等学校	2年	1名	伊都 キャンパス
10	伊良皆啓治 (教授)	システム情報科学研究院 (工学部電気情報工学科、共創学部)	福岡県立筑紫丘高等学校	2年	1名	伊都 キャンパス
11	高橋 幸奈 (准教授)	カーボンニュートラル・エネルギー国際研究 所物質変換科学ユニット (工学部物質科学工学科 応用化学部門 分子 コース)	福岡県立修猷館高等学校	1年	1名	伊都 キャンパス
12	村山 美乃 (准教授)	理学研究院 (理学部化学科)	福岡工業大学附属城東高等学校	2年	1名	伊都 キャンパス
13	松島 綾美 (准教授)	理学研究院化学部門 (理学部化学科)	九州産業大学付属九州高等学校 福岡県立福岡中央高等学校	2年 3年	2名	伊都 キャンパス
14	吉川 顕正 (教授)	理学研究院 (理学部地球惑星科学科)	福岡県立香住丘高等学校	2年	1名	伊都 キャンパス
15	風間 智彦 (准教授)	農学研究院 (農学部応用生物科学コース)	福岡県立城南高等学校 福岡県立筑前高等学校	3年 2年	2名	伊都 キャンパス
16	太田 真理 (准教授)	人文科学研究院 (文学部人文学科 人間科学コース)	筑紫女学園高等学校 福岡県立福岡中央高等学校	2年 3年	2名	伊都 キャンパス
17	浜本 貴一 (教授)	総合理工学研究院 (工学部融合基礎工学科 機械電気コース)	九州産業大学付属九州高等学校	2年	1名	筑紫 キャンパス
18	大瀧 倫卓 (教授)	総合理工学研究院 (工学部融合基礎工学科 物質材料コース)	福岡工業大学附属城東高等学校	2年	1名	筑紫 キャンパス
19	稲田 幹 (准教授)	中央分析センター (総合理工学府材料理工学メジャー)	福岡県立宗像高等学校	3年	1名	筑紫 キャンパス
					24名	

令和5年度九州大学若手女性研究者・女子大学院生優秀研究者賞（伊藤早苗賞） 若手女性研究者部門 最優秀賞 研究紹介

『行動解析と組織学を用いて精神疾患の病態を理解する』

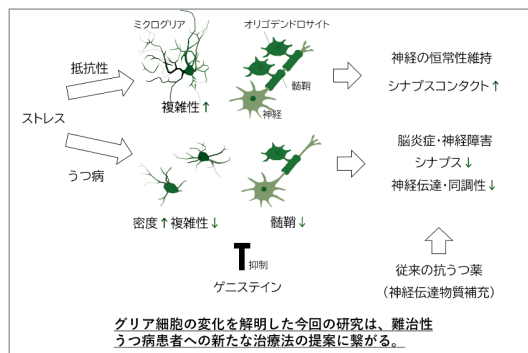


藤川理沙子
九州大学大学院薬学研
究院 助教

この度は、令和5年度伊藤早苗賞（女性研究者部門）最優秀賞を賜り、大変光栄に存じます。医学研究院・神野尚三教授、薬学研究院・津田誠教授をはじめ、サポートいただきました研究室の皆様と家族に深く感謝申し上げます。

うつ病は、強い気分の落ち込みや意欲の低下が続く疾患です。私はうつ抵抗性の差異を生み出す機序について、脳のグリア細胞の一種であるミクログリアに着目して研究しました。ミクログリアは脳で炎症応答を担う他、シナプス貪食や形成などにも関わりますが（Fujikawa and Tsuda, *Cells*, 2023）、うつ抵抗性への関与は不明でした。今回の研究で、うつ病の抵抗性にミクログリアの形態とシナプスとの相互作用が重要であることを明らかにしました（Fujikawa and Jinno, *Euro J of Neurosci*, 2022）。社会的ストレスを与えた後にうつ様行動を示したマウスの脳内では、複雑性の低い炎症惹起型のミクログリアが増加していました。一方で、抵抗性を示したマウスでは複雑性の高い形のミクログリアが増加し、シナプスとの接触が増加していました。

さらに、脳炎症を抑制することが注目されている大豆由来イソフラボン・ゲニステインの効果を調べました。ストレスを与えた後にゲニステイン

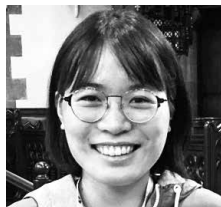


を2週間投与するとうつ様行動が減弱し、ミクログリア形態やシナプス接触の改善が確認できました（Fujikawa et al., *Neuropharmacology*, 2022）。また、うつ病で減少するグリア細胞のオリゴデンドロサイトが、ゲニステイン投与で回復することが分かりました（Fujikawa and Jinno, 大豆たん白質研究, 2021）。今回の成果は、神経伝達物質を補充する従来の抗うつ薬の作用点とは異なる、グリア細胞のストレスによる変化と、ゲニステインによる回復を示し、難治性うつ病患者への新たな治療法の提案に繋がると考えられます。

研究の他、大会長として「神経行動薬理若手研究者の集い」を九州大学で開催するなど、研究分野の発展と若手研究者の育成にも力を入れています。今回、伊藤早苗先生の「チャレンジして勝ち取る」というお言葉に背中を押され、賞に応募させていただきました。伊藤早苗賞受賞を励みに、今後ますます研究と若手育成活動に邁進し、様々なことに挑戦してまいりたいと思います。

令和5年度九州大学若手女性研究者・女子大学院生優秀研究者賞（伊藤早苗賞） 女子大学院生部門 最優秀賞 研究紹介

『発光性希土類錯体の電界発光素子応用に向けた発光機構解明』



宮崎 梨
九州大学大学院理学府
博士3年

この度は、令和5年度伊藤早苗賞（女子大学院生部門）において最優秀賞を賜り、大変光栄に思います。この度の受賞に際し、日頃の研究ならびに本研究に関してご指導いただきました恩田教授、宮田准教授に深く感謝申し上げます。また、共同研究をしていただき、研究に関して多くのアドバイスや議論をしていただきました北海道大学の長谷川教授、北川准教授および九州大学の安達教授、合志助教にも深く感謝申し上げます。

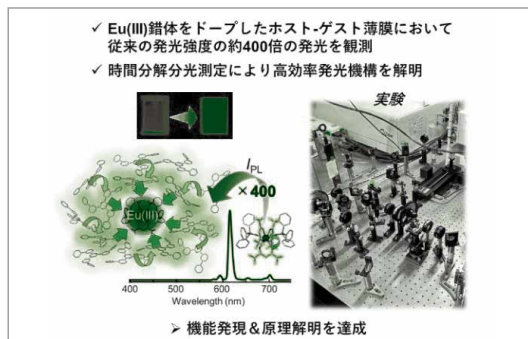
【研究概要】

三価ユウロピウム（Eu（III））錯体は高色純度発光を示すことから電界発光（EL）素子としての応用が期待されています。本研究では、Eu（III）錯体をホスト分子中にドーピングしたホスト-ゲスト薄膜を作製し、従来のEu（III）錯体に対して高効率・強発光を達成し、時間分解発光分光によりその発光機構を明らかにしました。

【研究成果】

1. ホスト分子選択による高効率・強発光の達成

様々なホスト分子を用いたホスト-ゲスト薄膜をスピンコート法により作製しました。光学物性評価により、Eu（III）の発光効率がホスト分子に大きく依存することが明らかとなりました。なかでも、トリアジン骨格を持つmT2Tをホスト



として用いた際に高い発光量子収率、従来のEu（III）錯体の400倍の強発光が得られました。また、ホスト分子からEu（III）錯体へエネルギー移動することでEu（III）が効率的に発光していることが分かりました。

2. 時間分解発光分光による発光機構解明

時間分解発光分光および過渡吸収分光を用いることで、ホスト分子が光吸収した後、Eu（III）発光に至るまでの全ての過程を明らかにしました。また、そのエネルギー移動効率が約100%であり、非常に効率的な発光過程であることを解明しました。この結果から、Eu（III）を効率的に発光させるために必要な設計指針を提案することに成功しました。

本研究成果とその測定・解析手法は、希土類錯体だけでなく一般的な発光性分子に応用可能であり、EL素子開発に大きく貢献できると考えています。この研究が今後の発光性希土類錯体の開発に貢献できれば幸いです。

オープンキャンパス企画 4年ぶりの対面開催 「将来の夢に向かって!～キャリアデザインってどんなこと?」

加藤悠紀

九州大学男女共同参画推進室 テクニカルスタッフ

2023年8月5日(土)、九州大学で開催されたオープンキャンパスに男女共同参画推進室からも出展しました。4年ぶりとなる対面企画は、キャリアデザインについて考える機会を高校生に提供するものです。当日会場となった男女共同参画推進室の多目的スペースには、九州各県をはじめ、遠方から参加した高校生36名のほか、保護者の方など、多数の来場がありました。

本企画の参加者(高校生)は、まずキャリアデザインワークシートに取り組みます。1つ目のステップ「自己理解」のために、自身の性格や科目の得手不得手などを記入し、現在の自分について把握。次のステップとして、理想の大学生活、その先のライフパスとキャリアパスについて記入し



「なりたい自分を明確」にします。その後、各々の作成したシートをもとに本学学生と対話を行い、現在疑問に思っていることを質問したり、アドバイスを受けて、進路選択や将来の自分について考えました。用意した5つのテーブルでは、高校生と大学生の1対1だけでなく、友達同士や、保護者も同席するなど、様々な形での対話が行われ、各テーブルでは時間を忘れて熱心に話し込む様子が見られました。

参加者アンケートの結果からは、「webでは知ることができなかった情報をたくさん知ることができた」、「自分の興味があることを探すのが楽しみになった」、「将来の選択の幅が広がった」、「大学生活への憧れがより強く具体的になった」、「(相談に応じた学生と) 同じ大学で学びたいと思った」、「今後何をしていくか考えるきっかけになった」、などの感想が寄せられ、進路や将来について、主体的、かつ、前向きに考える時間を過ごせた事がうかがえました。相談に応じた大学生からも、「高校生と話をする事で、自身の高校時代を思い返し気持ちを新たにすることができた」、「充実した時間を過ごすことができた」という感想がありました。

男女共同参画推進室の多目的スペースでは、男女共同参画に関する多数の書籍や資料を閲覧できるようになっています。さらに、当日は各学部の紹介パンフレットや、文理様々な学部の学生が自身の学部や研究について紹介した資料を掲示し、高校生だけでなく保護者の方が待ち時間を利用して情報収集をする姿も多くみられました。

現在はインターネット上に多くの情報があふ

れ、簡単に欲しい情報を手に入れる事ができます。オンラインで繋がる事や動画で講義などを視聴する事も容易になりました。しかし、映像や文字から得た情報と、実際にその場の空気に触れ、体験して得た情報には大きな質の違いがあります。今回の企画に参加した皆さんは、実際に大学生と対話し、大学の雰囲気を感じたことで、大学という場所のイメージがより具体的で身近なものになったのではないのでしょうか。

本企画へ参加する事で、少しでも受験や進学への不安が払拭され、更にはその先の自分の将来について主体的に考える機会を提供できるよう、今後もオープンキャンパスにあわせてイベントを開催していく予定です。



「Open Café 2023 ～九大女子卒業生に聞く！ 学生生活やキャリアについて」開催報告

相良祥子

九州大学男女共同参画推進室 職域限定専門職員

令和5（2023）年11月4日（土）、「九州大学アカデミックフェスティバル&ホームカミングデー 2023」が開催された。これにあわせて、本学伊都キャンパスにて「Open Café 2023 ～九大女子卒業生に聞く！学生生活やキャリアについて」を男女共同参画推進室と九州大学女子卒業生の会「松の実会」との共催で実施した。

Open Caféは、本学を卒業したOGの方をお招きして、卒業後のキャリアや学生生活、仕事とライフイベントとの両立についてご講演いただくイベントで、今年で10回目を迎えた。コロナ禍における感染拡大防止策のため、昨年度は、対面とオンラインのハイブリッド方式で開催した。しかし、行動制限の緩和に伴い、より参加者同士の直接の交流を要望する声を受けて、今年度は完全対面で実施した。参加者全員が一堂に会しての開催は、およそ4年ぶりであった。会場となった伊都キャンパス椎木講堂2階北ホワイエには、本学教職員や学生、卒業生を含む幅広い層からの参加があった。

今年度は、本学理学部を卒業した二名の方を講師にお迎えした。お一人は、福永憲子氏（パナソニック ハウジングソリューションズ（株）人事・総務部）、もうお一人は、才田聡子氏（北九州工業高等専門学校 准教授）である。それぞれ、学

生時代の過ごし方や卒業後の進路、キャリアのターニングポイントについて、ご自身の経験を振り返りながらお話しいただいた。



福永憲子氏

（パナソニック ハウジングソリューションズ（株）人事・総務部）

福永氏は、平成元（1989）年に本学理学部化学科を卒業後、現・三井化学の前身となる三井石油化学工業（株）に研究職として入社した。

趣味は旅行。仕事での出張を含め、これまでに全国47都道府県を回った。自身のコミュニケーションパターンについて、ソーシャルスタイル診断¹を用いながら「自己主張せずに感情が大切」というタイプだと分析した。

福永氏は、これまでのキャリアのターニングポイントについて次のように語った。

まず、転職である。子どもの頃から、建築に興味があった。諸般の事情により理学部へ進学したが、建築への憧れはずっと自分の中に抱き続けていた。新卒で採用された会社では、研究職として表面分析を行った。しかし、他の人ほど研究が好きでなかったことから、このまま狭い世界で生きてゆくことへの疑問を感じ始める。自分が本当にやりたいことは何だろう。ずっと好きだった建築への憧れを思い起こした。いろいろな思いが交錯する中、迷う自分の背中を押してくれたのは、社員研修を務めた講師の「社会経験こそが大切」という言葉だった。この言葉に導かれるように、新卒で入社した会社を退職した。

その後、松下電工（株）（現パナソニックハウジングソリューションズ（株））のショールームにて、派遣社員として再スタート。当時は二度と大きな組織で働くことは叶わないだろうと考えていた。しかし、地元・福岡で新たな出逢いに恵まれたこと、九大の同窓生組織である松の実会を通じて先輩方から多くの励ましやアドバイスをいただけたことが、自分にとっても大きな転機となった。新たな世界が開けることにワクワクした。

次に、親会社への転籍である。松下電工SFG（株）に契約社員として移籍後、仕事はとても充実しており、契約社員から正社員を経て、管理職へも昇任した。また、この頃から人材育成にも興味を持つようになった。人を育てることは面白い。自ら勉強してキャリアコンサルタントの資格も取得した。

そんな中、親会社であるパナソニック（株）へ

の転籍の話が持ち上がる。周りは「よかったね」と声を掛けてくれたが、当時の自分はそう思えなかった。自分のやりたいことができなくなるかもしれないという不安と、管理職としての立場を失う失望が胸をよぎった。これまでの自分の頑張りを認めてもらえなくなるのではないか。そんな思いもあった。結果的に親会社へ転籍したが、この出来事は、自分の価値観を変えるきっかけとなった。大きくても小さくても、自分がやりがいを感じられること、心から楽しめることを大切にしよう。そう考えることで、気持ちがスッと楽になるのを覚えた。

最後のターニングポイントは、大阪への転勤である。初めは故郷の福岡を離れることに抵抗があった。知らない土地で一からスタートすることが、とにかく嫌で仕方なかった。しかし、今振り返れば、故郷を離れることで見えるようになったものも多かった。松の実会を通じて築いた先輩方との交流や、趣味の登山を楽しむことで、目の前のことを前向きに捉えることができるようになった。ピンチはチャンス。初めは上手いかわからないように思うことがあっても、目の前の出来事に真摯に向き合うことが、人生を拓くきっかけになる。そんなふうに考えるようになった。

最後に、どんなときも前向きな姿勢を忘れないことが大切だと語った。そして、何かに躓いた時には自分の体験談を思い起こしてもらえれば、と締めくくった。

¹ 1968年にアメリカの産業心理学者、デビッド・メルリ氏が提唱したコミュニケーション理論のこと。ものの言い方や感情表現の傾向を組み合わせ、人の言動を1. Driving、2. Expressive、3. Amiable、4. Analyticalの4つに分類する。



才田聡子氏

(北九州工業高等専門学校 准教授)

才田氏は、平成17(2005)年に本学大学院理学府博士課程を修了。現在は北九州工業高等専門学校にて、物理系や情報工学系の授業および実験指導を行っている。

平成17(2005)年に着任した国立極地研究所では、地球の磁場を測るための観測器を南極に設置するプロジェクトを実施した。その後、平成20(2008)年には新領域融合研究センター、平成25(2013)年には統計数理研究所に着任。「データ同化」とよばれる手法を用いて、地球の磁場が太陽系の影響を受けどのように変化するのか、数値シミュレーションから得られた結果と現実の観測データのすり合わせを行った。

才田氏は、ポスドク時代に出産と育児を経験した。ポスドクとはPostdoctoral Researcherとよばれ、大学院博士課程の修了後に就く任期付の研究職をいう。有期雇用のため、一年ごとの契約更

新となるケースがほとんどである。そのため、ポスドクの任期中にできる限りの研究成果を上げることが、将来のキャリアを左右する要素となりうる。しかし、ポスドクはちょうど出産や育児などのライフイベントと重なる世代でもある。才田氏は、ポスドクのワーク・ライフ・バランスについて次のように語った。

まず、ポスドクであっても出産と育児は可能である。しかし、復職後のキャリアを見据えて、出産前にできる限りの手を打つことが鍵となる。そこで重要なのが、保育所への入所である。最近では、いわゆる「隠れ待機児童²」とよばれる子どもの数も6万人を超えるといわれる。特に都市部の場合、上の兄姉が保育所を利用していても入所できないというケースも多い。もし0歳児で保育所に入所できなければ、それ以降の入所は難しくなる。才田氏は、とにかく出産前に動くことが重要だと話す。できる限り早めに役所に相談すること、あらかじめ入所に必要な手続きを確認しておくことが大切だとアドバイスした。

また、先にも述べたとおり、ポスドクは年度ごとの契約更新が基本となる。そのため「勤務証明書³」を必要なタイミングで発行してもらえないという事態が起こる。勤務証明書は、保育所への入所手続で必ず提出が求められる。才田氏は、なかなか勤務証明書を発行してもらえずに苦労した経験を語った。しかし、そんな時に支えてくれたのが当時の上司である。自ら事務担当者を説得し

² 認可保育所に入らなかったのに待機児童に該当しない児童の例を指す。(1) 保護者が育児休業中、(2) 求職活動を休止、(3) 特定の施設のみを希望、(4) 東京都の認証保育所など自治体が独自で財政支援する施設に入所一の4項目が隠れ待機児童にカウントされる。

³ 現在は、こども家庭庁において策定された標準的な就労証明書へ様式が変更された。また、名称も「就労証明書」となった。

てくれた。その甲斐もあり、無事に勤務証明書を取得することができた。このように、いざとなれば周囲に助けを求めることも必要である。そのためには普段から良好な人間関係を築くことが大切となると語った。

さらに、双子を妊娠した時のエピソードを語った。まだ幼い上の子を抱えたまま、子ども3人の育児と仕事を続けることができるのか。初めは不安で仕方なかった。そんな時、杉並区役所で受けた「絶対に仕事は続けなさい」とのアドバイスが背中を押してくれた。双子の育児は精神的にも追い詰められやすい。だからこそ、逃げ場がなくなると自分がしんどくなる。幸い実家から近い工業高等専門学校で公募があり、すぐに応募、採用。地元へのUターン転職を果たし、実家の助けを借りながら何とか仕事と育児をこなすことができた。

最後に、才田氏は真似しない方がいいことを挙げた。それは、転職した際に出産の事実を職場に隠してしまったことである。任期付きのポストの場合、雇止めの問題がある。出産したことを知られると、クビになるのではないかと。その不安からなかなか周囲へ打ち明けることができなかった。しかし、仕事を続けながら育児を行うにあたって、周囲のサポートは不可欠である。才田氏は、



いざとなればサポートが求められるような環境を自ら作ることが大切であると語った。

後半では、2つのグループに分かれ、参加者を交えたディスカッションが行われた。筆者は、福永氏のグループに参加した。参加者からの「学生時代にやっておいた方がいいことはあるか」との質問に対し、福永氏は「まず友人をたくさん作る。そして、同世代の枠を越えて大人とも積極的に交流すること。コミュニケーションの取り方を学ぶことが大切」だと答えた。また、「社会に出る前に労働者としての権利を学んでおくことも重要」と語った。さらに「偶然の出来事にも真摯に向き合うことで、自分のキャリアは拓ける。前向きにチャンスだと捉えてほしい」とのメッセージを贈った。

様々な挫折を経験しながらも、自分の可能性を信じて着実に歩みを続けてこられたお二人の姿は、大変頼もしく、また大きな励ましを受けるものであった。参加者には学生も多くいたが、これからの自分の将来をしっかりと見据え、前向きに努力してくれるものと期待している。



令和5年度 ダイバーシティ推進トップセミナー 「ハラスメントのない大学環境を構築するために ～最近の動向と対策」開催

相良祥子 九州大学男女共同参画推進室 職域限定専門職員
上瀧恵里子 九州大学男女共同参画推進室 教授



講師：布柴靖枝氏
文教大学人間科学部教授・同大学院人間科学研究科研究科長
日時：令和5年12月26日（火）14:30－16:00

九州大学では平成27（2015）年度から女性研究者の上位職登用に向けた本学執行部、部局長、事務管理職への理解促進・意識啓発を目的に男女共同参画推進室が主催し、毎年ダイバーシティ推進トップセミナーを開催している。9回目となる本年度は、女性研究者を含む男女の教職員・学生が個々の力を十分に発揮できる環境整備のため、ハラスメントに対する意識改革と組織における対応力強化を目的とし、初めてハラスメント対策推進室との共催でトップセミナーを開催した。

講師の布柴靖枝氏は公認心理師などの資格をお持ちの専門家であり、「ハラスメントのない大学環境を構築するために～最近の動向と対策」のテーマを設定した。当日はオンラインで開催し、伊都地区をはじめ、学内各キャンパスから役員・執行部、部局長、事務系管理職、関係教職員など約130名の参加があった。

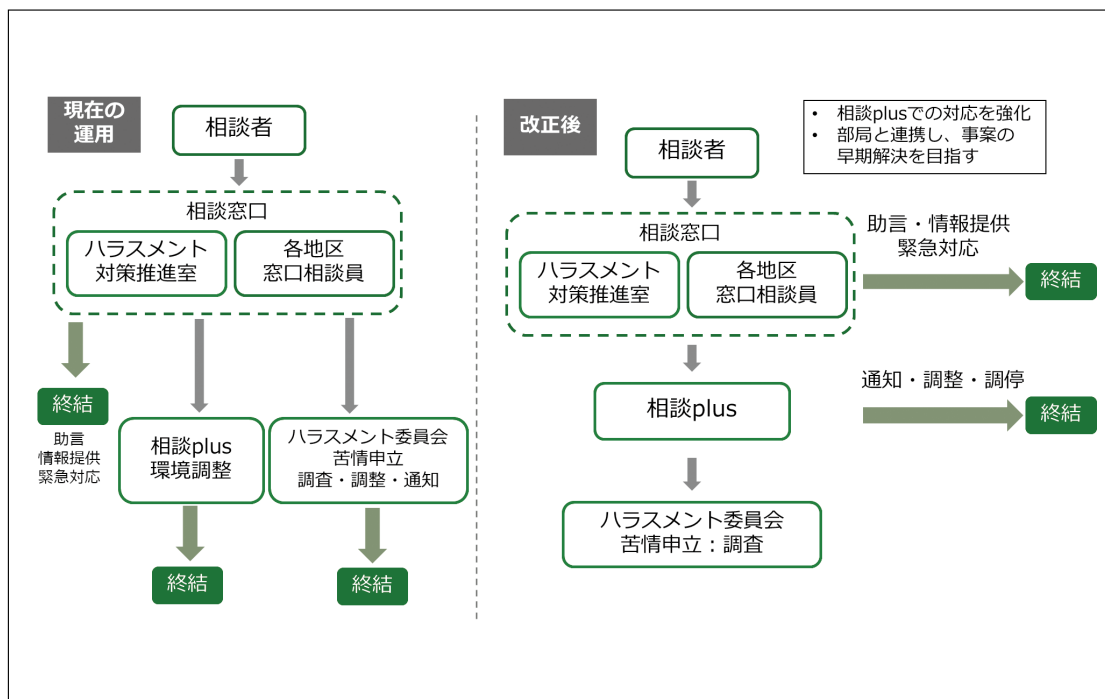
総合司会は男女共同参画推進室の河野銀子教授が務め、冒頭に石橋達朗総長から開会の挨拶があ

り、続いて神崎智子理事・男女共同参画推進室長から本セミナー開催の趣旨説明があった。

講演で布柴氏は、ハラスメントをめぐる最新の動向を踏まえながら、ハラスメント対策に取り組む意義、ハラスメントのない風土作りについて講演された。また、ハラスメントは組織の一番弱いところで生じやすいため、トップダウン方式で改善策を講じることが重要であると述べられた。

続いて、本学のハラスメント対策推進室副室長・コーディネーターの五十川直行氏から、本学におけるハラスメント苦情相談・対応に関する説明が行われた。五十川氏は、ハラスメントが重大な人権侵害行為であることにふれながら、早期の相談と迅速な対応が重要であると説明した。また、新たに「調停」機能が加わった相談plusについて紹介された。

質疑応答の時間には、参加者から聞き取りの際の留意点などの質問があり、布柴氏は具体的な注意事項を丁寧にご教示頂いた。また布柴氏からは、



九州大学のハラスメント苦情相談・対応体制

九州大学の防止体制は4名の相談員が全員有資格者であるなど、「非常に先進的に取り組まれている素晴らしい。他の大学の見本となるような活動を見せて頂けたらとても心強い」とのご意見をいただいた。最後に、ハラスメント対策推進室長である玉田薫副学長から閉会の挨拶があり、トップセミナーを締めくくった。

事後のアンケートでは、基調講演で事例を交えてわかり易く説明頂いたことと、ハラスメントに関する法令などが随時変更されていることを踏まえ、定期的な開催を望む声があった。また、個別には、「ハラスメントのない大学づくりの重要性を再認識した」「ハラスメントの兆候に早期に気づくことができるような組織運営を考えていきたい」などの感想が寄せられた。

今回のトップセミナーは、大学執行部、部局長、事務管理職等の参加者のハラスメントに対する意識改革を促し、組織としてハラスメント対策に取り組む重要性について理解を深める効果があった。

今後もハラスメント対策推進室を中心に、九州大学が一丸となってハラスメントのない大学環境の構築を目指していくことが期待される。

九州大学ハラスメント対策推進室 URL
<https://ohpc.kyushu-u.ac.jp/>

「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」事業の活動 —「先端型」5年目の進捗状況—

上瀧恵里子

九州大学男女共同参画推進室 教授

九州大学は、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」のうち、特色型（2015～2020年）、先端型（2019～2024年）、調査分析（2021～2022年）の3つに採択されている。本報告では本年度継続中の先端型の進捗状況を報告する。

「先端型」ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修（SENTAN-Q）

「先端型」は、女性研究者の海外派遣等を通じた上位職登用の一層の推進に対する支援である。九州大学は総長をトップとする全学体制で「ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修（SENTAN-Q）」を推進している（<https://sentan-q.kyushu-u.ac.jp/>）。SENTAN-Qの目的は、優れた研究業績を有する将来有望な女性ならびに若手教員に対し、世界トップレベルの研究教育力を実践的に身につける機会を与え、世界と伍して戦える真に実力のあるダイバーシティ・スーパーグローバル教員として育成することである。毎年男女10名ほどの研修生を選定し、2年間にSTEP1～6の国際研修を実施する。1期生から3期生の31名（女性17名、男性14名）は研修を修了し、既に2024年2月までに女性教授8名、女性准教授9名が誕生しており、現在は4期生

と5期生の20名が研修中である。また、事業推進のためのSENTAN-Q事業基金も設立している。（https://kikin.kyushu-u.ac.jp/info/news/view.php?cId=1677&r_search=&mode=1&page=1）

5年目を迎え、既にこれまで本誌の報告で研修の詳細は繰り返し紹介している[1]ため、本報告では本年度の実施状況、これまでの成果、修了生のその後の活躍を紹介する。

1. 本年度研修進捗状況

3期生（女性4名、男性7名）研修期間2021年8月～2023年7月

COVID-19による渡航制限などが緩和され、2022年8月以降、全員がSTEP6の海外渡航を実現し、現地での講義、学生指導を経験し、国際共著論文を仕上げている。研修修了後の10月には総長から直接SENTAN-Q修了認定書を授与されて



写真1 修了証授与式後の3期生（2023年10月）

おり、その後続々と一段階の昇任が続いている。これ迄授与式はCOVID-19や台風の影響でオンラインで開催されていたため、一堂に会しての授与式は初めてであった。

4期生（女性8名、男性2名）研修期間2022年8月～2024年7月

7月までにSTEP4研修で海外メンターのもと、学内の留学生への実践的研究指導を行い、国際共著論文を仕上げた。8月からはSTEP6の海外研修に取り掛かり、既に半数以上の研修生が海外渡航先での英語による講義、研究指導、共同研究を実施中である。また、並行してSTEP5の最新学問分野のリカレント教育に取り組んでおり、学内教員とともに自らの専門と異なる分野の学び直しを進める中、一部は異分野共同研究にも発展している。

5期生（女性7名、男性3名）研修期間2023年8月～2025年7月

7月に英語による面接審査（STEP1）を経て研修生に選定され、8月から研修を開始した。各研修生については2分程度の動画で紹介している（<https://sentan-q.kyushu-u.ac.jp/trainee/>）。

STEP2の第1回研修は8月にオンラインで、UCSDのCorinne Peek-Asa研究担当副学長によるMotivating new leaders and strengthening teamsの講義を受けた。続いて第2回研修では12月にUCSDのTamara Cunningham副学長補佐を九州大学に招聘し、Strategic Internationalization and the Global Research Agenda と the Intersections of Internationalization and Diversity, Equity and Inclusionの講義を受けた。1期生以来4年ぶりとなる九州大学での対面講義となった（写真2参照）。




写真2 5期生STEP2研修（2023年12月）

この後、2～3月にかけ、STEP3の英語によるアクティブラーニング型教授法をUCSDの専門家チームからオンラインにて受講する。また既に8月からSTEP4の留学生研究指導とSTEP5のリカレント教育も並行して実施している。

2. SENTAN-Qの意義と成果

SENTAN-Q研修は開始3年目の2021年の中間評価で、所期の計画を超えた取組が行われているとの総合評価「S」を得、さらに「教員育成研修という新たなスタイルでダイバーシティの推進を目指す野心的な取組であり成果が期待できる。」とのコメントを受けた[2]。コーディネータの玉田薫副学長は開始当初よりSENTAN-Qの内容や成果を説明する講演の依頼を多数受けており[3]、また、前年度発行の本誌においても詳しく記述している[4]ため、ここでは講演の際のスライド[5]を利用して簡単に紹介する。

まずSENTAN-Qの意義であるが、スライド1に



SENTAN-Q 事業の意義・挑戦性

- 女性研究者の上位職登用を通じて**人事の流れを正常化する** ✓
※**年功序列社会の問題解決**
- 重要ポイント（さまざまなか）
 - ① **女性の応募**を促すしかけ（透明性の高い、バイアスのない公平な審査）
 - ② **部局からの女性の推薦**を促すしかけ（男女1:1を明記）
 - ③ 部局からの応募を促すしかけ（部局への**インセンティブ**付与）
- 研究教育力ならびにマネージメント能力強化により**将来の女性幹部候補生**の輩出を目指す ✓
- 部局/職位/年代/国籍/性別を越えて共に学んだ研修生が将来各部局の運営に関わることで、**真に公平な大学環境を実現する** ✓
※**長期的ビジョン**
- 単に女性教員を増やすのが目的ではない（**モデル事業としての意義**）
「どうすれば女性研究者が今以上に活躍できる組織になるか？」

作成 玉田 薫

スライド1 SENTAN-Q の意義 [5]

その挑戦性も含めて、人事の流れの正常化、女性幹部候補生の選出、長期的ビジョンでの真に公平な大学環境の実現、モデル事業としての女性研究者の活躍促進の4項目が上がっている。また、女性研究者の上位職登用を促す仕掛けとして3つのポイントも示している。

次に研修を進める中で得られた成果は、スライド2に示す4つが挙げられる。また、スライドには記載していないが、ライフイベントとの両立についても、1期生の女性8名は全て母親で、うち2人は研修期間中に出産したが、全員無事研修を

やり遂げている。2期生の男性研究者1名は育休を取得しながらも無事研修を修了した。現在研修中の4期生1名も出産している。過去にも分析例を示した[6]のように、環境さえ整えば、出産・育児等のライフイベントと研究は両立できることを再度強調したい。


3. 研修修了生の活躍

冒頭に述べたように既に3期生まで31名が研修を修了し、順次1年以内の昇任を果たしている。

修了生は研修中に自ら組織したネットワークを基盤に国際共同研究を推進し、早速1名が科学技術振興機構の令和5年度先端国際共同研究推進事業「次世代のためのASPIRE」に採択されるなど、大型予算の獲得も順調である。研究面は当然のことながら、中には部局の運営業務に参画する者も出てきており、さらに海外機関[7]や大学の広報誌[8,9]など女性研究者の活躍を広くアピールする広報活動にも積極的に協力している。8月には育休を取得した男性研修生による学内

FDでの講演[10]、11月には子ども帯同の出張に関する交流会での事例紹介を行う[11]など、ライフイベントとの両立を可能にする啓発活動にも協力している。

研修生の姿勢や意気込み、研修実績などは毎年発行する和文・英文の年次報告書で紹介しており、ホームページからも閲覧可能である。(https://sentan-q.kyushu-u.ac.jp/report/)



SENTAN-Q 研修生から学んだこと

1. 研究業績だけに頼らない**人事評価**の意義
 - ダイバーシティ等に関する貢献を人事評価に含めることは米国では珍しくない⇒健全な大学作りに貢献できる教員の採用
2. **メンター制度**導入の大きな効果
3. **明確で具体的な目標設定**をする意義
 - 国際交渉力、研究指導力、リーダーシップ等を確実に身につける
4. **ジェンダーバイアス**問題
 - マジョリティとマイノリティの問題
 - 文系理系問題、年齢問題もおそらく同様

研修生のコメントより抜粋
(メンターの効果)

- 海外メンターの指導によって、1段階質の高い論文となった。
- 研究上のよきパートナーと日頃から議論を重ねることは、楽しく前向きな気持ちで研究生活を送るために有効である
- 学びとともに自信がついた。
- 学生のモチベーションを高める方法を学んだ
- 戦略的な予算申請を学んだ

作成 玉田 薫

スライド2 SENTAN-Q の成果 [5]

4. 今後に向けて

5年目を迎えたSENTAN-Q研修の実施効果により、通常人事においても女性の上位職への登用は増加しつつある。SENTAN-Qの研修を通じ、性別、年代、職位を問わず、多様な人材がともに学ぶ、あるいはともに活動する機会を提供することで、大学研究者から無意識のバイアスを排除し、真に公平な大学環境の実現に繋がることが期待される。

九州大学は「特色型」事業による環境整備を基盤に、「調査分析」事業で得られた課題とその解決策を実践し、今後も研究環境のダイバーシティ推進に努めていく。

参考情報等

- [1] ポリモルフィア [ISSN 2424-1113] Vol.6, pp.48-51 (2021年3月), Vol.7, pp.49-52 (2022年3月), Vol.8, pp.50-53 (2023年3月)
- [2] https://www.jst.go.jp/shincho/josei_shien/kanan/r1.html
- [3] 2023年度は徳島大学ダイバーシティ研究環境調和推進プロジェクトシンポジウム、JSPS男女共同参画推進シンポジウムなどがある。
- [4] ポリモルフィア Vol.8, pp.18-33 (2023年3月)
- [5] 徳島大学ダイバーシティ研究環境調和推進プロジェクトシンポジウム (2023年12月5日於徳島) 基調講演「SENTAN-Qの目指すもの：九州大学におけるダイバーシティ推進」玉田 薫
- [6] ポリモルフィア Vol.4, pp.40-47 (2019年3月)
- [7] <https://www.eurekalert.org/news-releases/982310> (2024年1月10日閲覧)
- [8] https://www.kyushu-u.ac.jp/f/51184/CONNECT_Issue4.pdf#page=4 CONNECT Kyushu University, Issue 4, p.5, (2023年1月)
- [9] 九大広報Vol.128, pp.15-17 「Close up 九大」 (2023年12月)
- [10] 令和5年度九州大学馬出地区4部局合同男女共同参画FD (2023年8月) 講演「SENTAN-Qでの学び：海外PIとの交渉をどう進めたか？」太田真理
- [11] 九州大学男女共同参画推進室ランチタイム交流会「子どもを連れて出張へー経験談と制度の紹介」(2023年11月27日)においてSENTAN-Q1期生3名の女性研究者が経験談を紹介した。https://danjyo.kyushu-u.ac.jp/notice/e_view.php?cId=3085&

九州大学男女共同参画推進室

オンライン開催
(ZOOM)

霜月ランチタイム交流会

子どもを連れて出張へ
～経験談と制度の紹介

2023年 11/27 (月) 12:10～13:00

家族の状況などにより、お子さんを連れて出張せざるを得ないことが有るかもしれません。そんな時、お子さんのケアをどのようにすれば良いか戸惑うことも多いのではないのでしょうか。
今回の交流会ではお子さんを帯同されるときに一定の条件下で利用できる制度を紹介いたします。また、実際に国内あるいは海外へお子さんを連れて出張された方に事前の準備や現地での留意点など色々な経験を紹介していただきます。経験談をお聴きした後は、質疑応答や意見交換などで情報交換いただけます。

制度紹介：男女共同参画推進室 上瀧恵里子 教授
話題提供1(国内出張) 若林里衣 准教授
話題提供2(国内及び海外短期出張) 山内由紀子 教授
話題提供3(海外短期及び長期出張) 坂東麻衣 教授
質疑応答・意見交換

交流会案内のフライヤー [11]